

JAたいせつ 水稲・畑作 栽培基準

栽培基準に基づいた生産により
『たいせつ産農産物』の生産情報を更に信頼あるものに
作り上げましょう。

- ◆栽培基準は定期的に更新をし差替えを配布します。最新の状態で大切に使用しましょう。
- ◆同じ名前の資材でも登録内容が変更されている場合がありますので、
使用時は必ず基準を確認しましょう。



JAたいせつ「稲穂の里」協議会
JAたいせつ



たいせつなポイント 1

健苗の育成に向けて

健苗の指標

- 草丈 : 10~13cm (中苗マットは10~12cm)
- 第一鞘高 : 2.5cm以下
- 葉数 : 3.6~4.3葉 (ゆめぴりか)
: 3.6~4.0葉 (ななつぼし)
: 3.6~4.4葉 (きらら397)
- ※中苗マットは3.1~3.5葉



老化苗

初生葉が右のように黄化している場合は、老化の場合があります。すみやかに移植しましょう。移植まで日数がある場合は、追肥を行います。



育苗日数の見直し

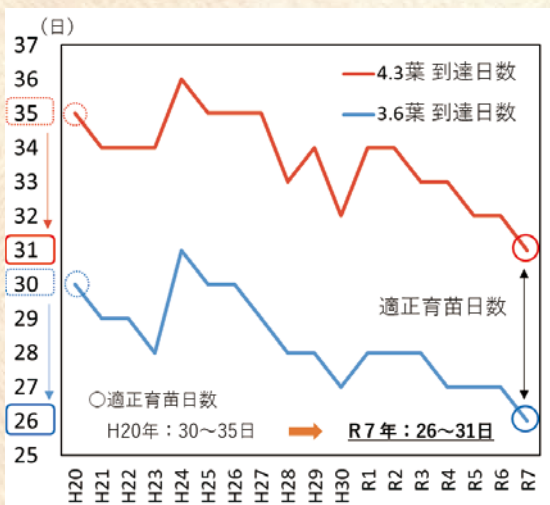


図 育苗日数と葉齢 (3.6葉および4.3葉) の関係 (H20~R7)
(上川農業改良普及センター本所 作況ほ 成苗ポットななつぼし
移植時苗質 H20~R7の平年値より算出)

換気の徹底

健苗 一般的な苗



健苗の特徴

- 葉、節間が短い、初生葉が緑色
- よく外気に当たっているため硬い

温度管理のポイント

- 出芽揃いから換気 (肩・裾) の徹底 (20℃を超えたら換気を意識)
- 夜間は10℃以下にしない
- 二重トンネルを早朝からとる
- 3葉期から外気に慣らす

結論

- 1, 一昔前まで、育苗日数は30~35日が目安と言われていましたが、近年は苗の生育が早まっています。は種日を遅らせる・分散させる等を検討しましょう。
- 2, 出芽揃いからの換気の徹底が重要です。温度計は必ず設置し、日中に20℃を超えてきたら換気を行いましょう。



たいせつなポイント 2

ゆめぴりかの作付け圃場選択



Q. なぜ「ゆめぴりか」の基準品がでにくいのか?

A. JAたいせつのほ場は
土壤肥沃度が高いほ場が多いからです!

土壤肥沃度(培養窒素)とは

- 土壤から放出される窒素で、地温が高くなると放出される。
- この数値が高いほど、多くの窒素分が土壤から放出される。

JAたいせつでは、6割以上のほ場の土壤肥沃度が「やや高い」or「高い」。(図1)
つまり、そもそも生育後半に窒素が多く放出される土壤が多い。

水稻のタンパク含有率は、生育後半に窒素を過剰に吸収してしまうと高まるため、
土壤肥沃度が高いほ場で全層施肥量が多いと品質低下を助長する。

土壤分析で
わかります!

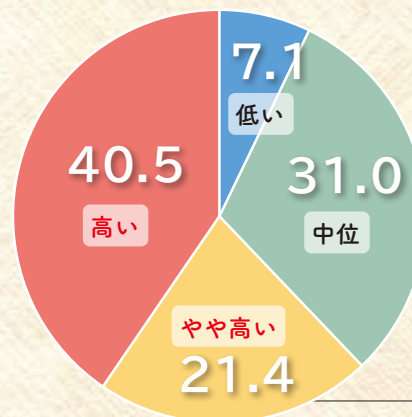


図1 JAたいせつの土壤肥沃度 (%)
(土壤分析筆数126点 H29)

粘土地などで水はけが悪い

地温上昇が遅れる

生育後半に窒素が放出される※

高タンパク、白未熟粒の多発生

図2 タンパク含有率増加のパターン

土壤分析を実施して
作付け品種の
再検討をしましょう!

結論

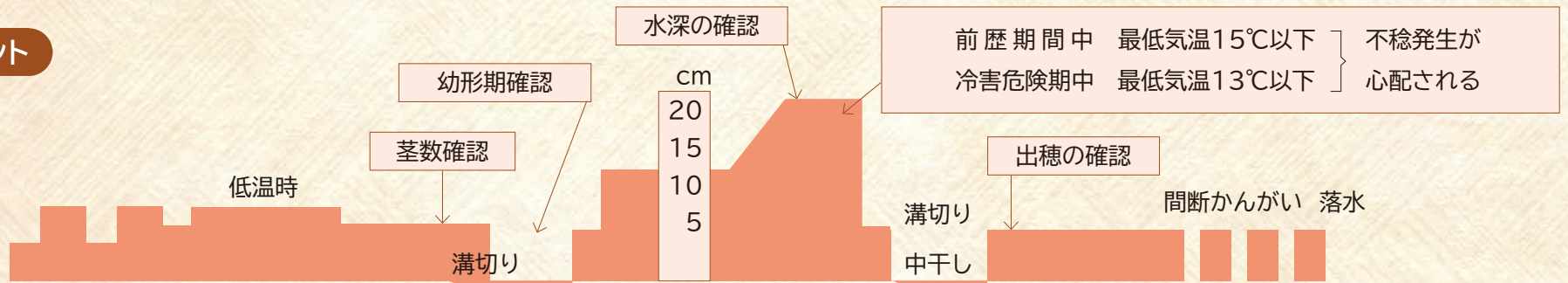
- 1 低タンパクを目指すには**土壤肥沃度の低いほ場**に作付けするのが最も有効な手段です。
- 2 **側条施肥量・割合を高める施肥設計**を検討しましょう。
- 3 **基本技術**(健苗育成、適期移植、適正栽植密度、生育期節に合わせた水管理、透排水性改善など)を必ず**組み合わせ**て実施しましょう。

水稻栽培暦

「たいせつ産 トップランクの米づくり」


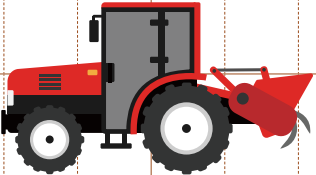

◆品質、食味基準◆ ・1等米100% ・整粒歩合80%以上 ・精米タンパク6.8%以下

水管理のポイント



3・4月	代かき 移植			「ワキ」の確認			止葉期 (前歴期間10日間) (冷害危険期7日間)			土壌水分の確認			刈取り		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
<ul style="list-style-type: none"> ▼ 稲わらの搬出、堆肥化の励行 ▼ 適正な水、温度管理 ▼ 適期は種作業 ▼ 水田乾燥の促進(溝きり、心土破碎) ▼ 融雪材の散布 	5月 <ul style="list-style-type: none"> ▼ 適正植付(1.5、2.0cm)活着までやや深水管理 ▼ 栽植密度の確保 ▼ 適期内早期移植の励行 ▼ 練り過ぎない均平な代掻き ▼ 側条施肥による初期生育向上 ▼ 地力に応じたチッ素施肥 			6月 <ul style="list-style-type: none"> ▼ あぜ草刈りの励行 ▼ 日中は浅水止水、入水は夜間、早期管理 ▼ いもち病水面施用剤の施用(中干し後) ▼ 病虫害発生予察と適期防除(8月中旬まで) 			7月 <ul style="list-style-type: none"> ▼ ケイ酸資材の追肥 ▼ 不稔防止の水管理(前歴、危険期の深水) ▼ 危険期終了後の溝切り、出穂直前までの中干し ▼ 出穂期の確認 ※開花期間中、最高気温24℃以下が4日以上続くとは不稔増 			8月 <ul style="list-style-type: none"> ▼ 土壌水分比60%以上維持(足跡が軽く付く程度) ▼ 登熟促進の水管理 			9月 <ul style="list-style-type: none"> ▼ 溝切り、心土破碎、暗渠など透排水改善 ▼ 稲わらの搬出、堆肥化の励行 ▼ 適正網目と丁寧な調整 ▼ 二段乾燥の実施 ▼ 適期刈取の励行 		


水稻栽培計画

月	3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月																																															
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下																																													
主な作業	融雪材散布			耕起・砕土・施肥			代かき・移植			幼穂形成期確認			出穂期の確認			収穫適期の判断																																																					
	育苗ハウスの準備			本田・畦畔・用水整備			栽植密度の確保			中干し			ケイ酸の追肥			溝切りの施工			収穫・乾燥・調整																																																		
	播種			育苗管理			除草剤散布			溝切り			深水管理			中干し			稲わら処理			溝切り・心土破砕																																															
				稲わら処理			分げつ促進の浅水管理			病害虫発生予察																																																											
雑草・病害虫対策時期							<ul style="list-style-type: none"> ■いもち病・イネドロオイムシ(箱施用) ■本田除草剤 						 <ul style="list-style-type: none"> ■いもち病(本田) ■本田防除(1回目/いもち病・カメムシ類) ■本田防除(2回目/いもち病・カメムシ類) ■本田防除(3回目/カメムシ類) 																																																								
苗床・本田管理	<ul style="list-style-type: none"> ■本田融雪材(ケイカル:120kg/10a) ■苗床除草剤(サンアッシュ:80~100 kg/10a) ■置床肥料【成苗ポット・型枠】(S066:800g/坪)【箱マット】(無肥料) ■本田肥料【基肥】(チッ素7.5~9.5kg土壤別による) 						<ul style="list-style-type: none"> ■ケイ酸の追肥(ゆめシリカ、粒状ケイカル20kg/10a) 						<ul style="list-style-type: none"> ■側条肥料(基肥との合計チッ素7.0~9.0kg土壤別による) 																																																								
<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="3">土壤区分</th> <th rowspan="3">土壤群</th> <th rowspan="3">全層施肥</th> <th colspan="3">チッ素</th> <th rowspan="3">リン酸</th> <th rowspan="3">カリ</th> </tr> <tr> <th colspan="3">組み合わせ施肥</th> </tr> <tr> <th>全層</th> <th>側条</th> <th>(合計)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>低地土(乾)</td> <td>褐色低地土</td> <td>9.5</td> <td>6.5</td> <td>2.5</td> <td>(9.0)</td> <td>8.0</td> <td>8.0</td> </tr> <tr> <td>低地土(湿)</td> <td>グライ土・灰色低地土</td> <td>9.0</td> <td>5.0</td> <td>3.5</td> <td>(8.5)</td> <td>8.0</td> <td>8.0</td> </tr> <tr> <td>泥炭土</td> <td>泥炭土</td> <td>7.5</td> <td>3.0</td> <td>4.0</td> <td>(7.0)</td> <td>8.0</td> <td>8.0</td> </tr> <tr> <td>台地土</td> <td>灰色台地土</td> <td>8.5</td> <td>4.0</td> <td>4.0</td> <td>(8.0)</td> <td>8.0</td> <td>8.0</td> </tr> </tbody> </table>																								土壤区分	土壤群	全層施肥	チッ素			リン酸	カリ	組み合わせ施肥			全層	側条	(合計)	低地土(乾)	褐色低地土	9.5	6.5	2.5	(9.0)	8.0	8.0	低地土(湿)	グライ土・灰色低地土	9.0	5.0	3.5	(8.5)	8.0	8.0	泥炭土	泥炭土	7.5	3.0	4.0	(7.0)	8.0	8.0	台地土	灰色台地土	8.5	4.0	4.0	(8.0)	8.0	8.0
土壤区分	土壤群	全層施肥	チッ素			リン酸	カリ																																																														
			組み合わせ施肥																																																																		
			全層	側条	(合計)																																																																
低地土(乾)	褐色低地土	9.5	6.5	2.5	(9.0)	8.0	8.0																																																														
低地土(湿)	グライ土・灰色低地土	9.0	5.0	3.5	(8.5)	8.0	8.0																																																														
泥炭土	泥炭土	7.5	3.0	4.0	(7.0)	8.0	8.0																																																														
台地土	灰色台地土	8.5	4.0	4.0	(8.0)	8.0	8.0																																																														
																																																																					

水稻施肥基準

- 1, 施肥基準は一定の地力水準を前提に、必要とされるチッ素 (N)、リン酸 (P)、カリ (K) 肥料要分量を示したものである。
- 2, 本田におけるチッ素施用量は±1.0kg程度の範囲内において肥沃度等の諸条件を考慮し決定する。
- 3, 本田において融雪が早く、前年秋の天候状況と耕起前のほ場乾燥が良好だと、土壌の有機物の分解が進み無機態チッ素の発生量が多くなるため、乾燥の程度に応じて施用チッ素量を減らす (乾土効果によるチッ素の減肥)

①育苗施肥基準

施肥基準	育苗様式	中 苗		成 苗		備 考
		箱マット	型枠	箱ポット	成苗ポット	
基 肥		チッ素 } リン酸 } 各1.0g/箱 カリ }	置床施肥 枠内無肥料	置床施肥および チッ素 } リン酸 } 各0.6g/箱 カリ }	置床施肥および チッ素 } リン酸 } 各0.5g/箱 カリ }	置床施肥量 チッ素:25g/m ² リン酸:30g/m ² カリ:20g/m ²
追 肥		①1~1.5葉期 ②2~2.5葉期 各チッ素1.0g/箱		①1~1.5葉期 ②2~2.5葉期 各チッ素1.0g/箱		

*基肥の箱マット及び型枠では、置床施肥は不要です。

*「ゆめぴりか」の育苗時の追肥は成苗ポット・型枠苗で2.5葉と移植5日前に実施しましょう。

②本田施肥基準

(kg/10a)

土壌区分	土壌群	目標収量 (kg/10a)	全量全層施肥	チッ素			リン酸	カリ
				全層・側条組合せ施肥				
				全層	側条			
低地土(乾)	褐色低地土	570	9.5	9.0	6.5	2.5	8.0	8.0
低地土(湿)	グライ土 灰色低地土	570	9.0	8.5	5.0	3.5	8.0	8.0
泥炭土	泥炭土	570	7.5	7.0	3.0	4.0	8.0	8.0
台地土	灰色台地土	540	8.5	8.0	4.0	4.0	8.0	8.0

水稻肥料主要銘柄

①育苗用の肥料銘柄

※リン酸とカリを含む資材は土壤分析の結果に基づき施用しましょう。

銘柄	チッ素 (アンモニア態)	リン酸 (水溶性)	カリ	苦土	備考
くみあいS066	10.0 (8.5)	6.0 (4.5)	6.0	6.0	基肥用 マンガン0.2%、ホウ素0.07%
くみあい育苗10号	8.0 (8.0)	12.0 (10.0)	10.0	3.0	基肥用
くみあいNP57	15.0 (13.0)	7.0 (5.0)			追肥用
くみあい苗床用液肥	18.0 (5.0)	6.0 (6.0)			追肥用

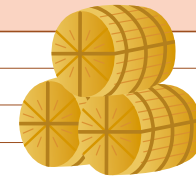
②本田使用銘柄

銘柄	チッ素 (アンモニア態)	リン酸 (水溶性)	カリ	苦土	備考
BB444	14.0 (14.0)	14.0 (11.0)	14.0		全層
たいせつの恵み	14.0 (14.0)	10.0 (8.0)	10.0		全層
BB482	14.0 (11.0)	18.0 (13.0)	12.0	3.0	全層
BB484	14.0 (14.0)	18.0 (14.0)	14.0		全層
くみあい443	14.0 (13.0)	14.0 (7.5)	13.0	3.0	全層
くみあい002	10.0 (10.0)	20.0 (12.0)	12.0	3.0	全層 基盤整備水田・復元水田用
ワイドユース450	14.0 (14.0)	15.0 (11.0)	10.0		全層 完全受注生産
くみあい444	14.0 (14.0)	14.0 (12.0)	14.0		側条
くみあい660	16.0 (16.0)	16.0 (14.0)	10.0		側条
くみあい884	18.0 (18.0)	18.0 (13.0)	4.0		側条
BB側条3413	34.0 (4.4)	13.0 (10.0)			側条 排水不良田には適しません



③土壤改良等銘柄

銘柄	保証成分
ケイカル	可溶性珪酸30%、アルカリ分45%、<溶性苦土1%
粒状ケイカル	可溶性珪酸30%、アルカリ分45%、<溶性苦土1%
ミネカル粉	可溶性珪酸14%(含有成分)、アルカリ分40%、<溶性苦土2%
スーパーミネカル	可溶性珪酸19%、アルカリ分43%、<溶性苦土2.0%
粒状テツシリカ	可溶性珪酸25%、アルカリ分41%、<溶性苦土4%、鉄鉱石9.75%
とれ太郎P	可溶性珪酸30%、アルカリ分40%、<溶性リン酸6%、<溶性苦土12%
ピートモスB級	pH4.5~5.5
サンアッシュ	水稻苗床専用融雪材(pH約5.0に調整済)



水稲病害虫防除基準

①育苗病害虫

病害虫名	防除時期	処理方法	薬剤名	成分数	使用量	使用回数	注意事項
苗立枯病 フザリウム・ピシウム	は種時または 発芽後	土壌灌注	タチガレエースM液剤	2	500~1000倍 500ml / 箱	1	使用濃度、使用量が多すぎると一時生育抑制を起こす。
ウンカ類 イネドロイムシ イネミズゾウムシ	は種時(覆土前)~ 移植当日	は種時施用 育苗箱施用	フェルテラ箱粒剤 アドマイヤーCR箱粒剤	1 1	中苗 50g/箱 成苗 30g/箱	1 1	フェルテラ箱粒剤はウンカ類に効果がない。 同系統の薬剤の連用は効果が劣る場合がある。
	移植2日前~ 移植当日	育苗箱灌注	アドマイヤー顆粒水和剤	1	中苗 500~1000倍 500ml / 箱 成苗 500~1000倍 300ml / 箱	1	移植2日前~移植当日に灌注する。 同系統の薬剤の連用は効果が劣る場合がある。
	移植3日前~ 移植当日	育苗箱灌注	ミネクトスター顆粒水和剤	2	中苗 200倍 500ml / 箱 成苗 200倍 300ml / 箱	1	生育初期に葉先枯れ症状が見られることがあるが、その後回復するので通常管理を維持する。
いもち病 ウンカ類 イネドロイムシ イネミズゾウムシ	は種時(覆土前)~ 移植当日	は種時施用 育苗箱施用	ルーチンアドマイヤー箱粒剤	2	中苗 50g/箱 成苗 30g/箱	1	同系統の薬剤の連用は効果が劣る場合がある。 育苗箱の上から散布する場合は散布後灌水する。
			ツインターボフェルテラ箱粒剤	3		1	
いもち病 イネミズゾウムシ イネドロイムシ	は種時(覆土前)	は種時施用	アプライパディート箱粒剤	2		中苗 50g/箱 成苗 30g/箱	1
	は種時(覆土前)~ 移植当日	育苗箱施用	ヨーバルトップ箱粒剤	2	1		
	移植7日前~ 移植当日	育苗箱灌注	ブーンバズSC	2	中苗 500倍 500ml / 箱 成苗 500倍 300ml / 箱		1

《育苗時のピシウム(立枯病)リゾース(白カビ)防除》

◇特にピシウム菌による苗立枯病(ムレ苗)に対しては、薬剤防除に頼らず、徹底した育苗管理で耕種的防除に努めましょう。

- ①温湯消毒後は、雑菌の感染を防ぐため、種子の受け取り後は直ちに浸種を開始する。
- ②浸種は催芽をそろえる為、水温11℃~12℃に管理し、5~6日間(高温登熟期は7~9日間)前後浸種する。
- ③浸種期間中は、必ず1日置きに水を交換し、交換の際は、種粒に酸素を十分に供給する。
- ④出芽時の温度を32℃以上の高温にしない。
- ⑤床土は砂壤土、埴壤土を選択し、粘土質を避け、pHは4.5~5.0に調整する。
- ⑥厚播きを避ける(成苗ポット:催芽粉3~4粒/穴・中苗マット:催芽粉95~125g)。
- ⑦育苗中の温度管理に注意し、極端な低温(10℃以下)や高温にしない。
- ⑧灌水は一度に十分な量を与え過不足なく行う。特に過灌水は避ける。
- ⑨育苗箱などの資材をブラシで良く水洗いしておく。



32℃以上

②本田病害虫（一般防除）

対象病害虫	防除時期	処理方法	薬剤名 粒剤	成分 数	使用量 (10a)	使用 回数	安全使用 基準	防除方法・注意事項
いもち病	初発の 約10日前ころ	水面施用	オリゼメート1和粒剤	1	1kg	2	収穫14日前まで	散布後4～5日は湛水に保ち、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。 施用(投入)の目安は幼形期とする。
			コラトップジャンボP	1	50g×10個	2	葉いもち初発生の 20日前～初発時	
イネドロイムシ イネミズゾウムシ ウンカ類	5月下旬～ 7月中旬	水面施用	トレボン粒剤	1	3kg	3	収穫21日前まで	散布後3～4日は湛水に保ち、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。
ウンカ類 カメムシ類	7月中旬～ 8月下旬	水面施用	スタークル1和H粒剤	1	1kg	3	収穫7日前まで	散布後4～5日は湛水に保ち、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。

③本田病害虫（地上液剤少量散布防除）

対象病害虫	防除時期	処理方法	薬 剤 名	成分 数	希釈 倍数	散布水量 (10a)	使用 回数	安全使用 基準	防除方法
ウンカ類 カメムシ類	6月中旬～ 8月下旬	茎葉 散布	トレボン乳剤	1	600倍	25ℓ	3	収穫14日前まで	混用で使用する場合は、物理的変化や散布装置との適合性が確認された薬剤を選定する。 薬剤の混合はまず一つの薬剤を水で希釈した後他剤を混合し、散布直前にもよく攪拌する。 散布装置の作業前点検、薬剤散布後の洗浄は十分に行う。 ※穂ばらみ期以降は4回以内
			スタークル液剤10	1	300倍	25ℓ	3	収穫7日前まで	
			キラップフロアブル	1	500倍	25ℓ	2	収穫14日前まで	
いもち病	7月中旬～ 8月下旬	茎葉 散布	ビームゾル ブラシンフロアブル	1 2	300倍 300倍	25ℓ 25ℓ	3 2	収穫7日前まで 収穫7日前まで	
いもち病 カメムシ類 ウンカ類	7月中旬～ 8月下旬	茎葉 散布	ビームエイトスタークルゾル	2	250～ 300倍	25ℓ	3	収穫7日前まで	
			ダブルカットレボンフロアブル	3(2)	300倍	25ℓ	2	穂揃期まで	

※薬剤成分数の（ ）内はYES!clean農産物の栽培における成分数
※使用回数「回以内」

◇農薬の飛散（ドリフト）には十分注意しましょう◇

JAたいせつ地域は、農薬の飛散（ドリフト）対策として、水面施用剤防除・液剤防除を行っております。

防除を実施する際は周辺作物をよく確認し、近隣生産者と相談の上、飛散（ドリフト）対策を講じ、問題の発生リスクを最小限にしましょう。

具体的な実施方法は、「JAたいせつ ポジティブリスト対策事項」を参考に軽減対策に努めましょう。

④本田病害虫（動力噴霧機防除）

対象病害虫	防除時期	処理方法	薬剤名 乳剤・水和剤 (水量100L)	成分数	使用量(10a)	使用回数	安全使用基準	防除方法・注意事項
イネミズゾウムシ イネドロオイムシ ウンカ類	6月中旬～ 7月中旬	茎葉 散布	トレボン乳剤	1	50mℓ /2000倍	3	収穫14日前まで	地上液剤少量散布参照 
カメムシ類	7月中旬～ 8月下旬							
カメムシ類 ウンカ類	7月中旬～ 8月下旬	茎葉 散布	スタークル液剤10 キラップフロアブル	1 1	100mℓ /1000倍 50mℓ /2000倍	3 2	収穫 7日前まで 収穫14日前まで	
いもち病	7月中旬～ 8月下旬 出穂期～	茎葉 散布	ビームゾル ブラシンフロアブル	1 2	100mℓ /1000倍 100mℓ /1000倍	3 2	収穫 7日前まで 収穫 7日前まで	
いもち病 カメムシ・ウンカ類	7月中旬～ 8月中旬	茎葉 散布	ビームエイトスタークルゾル ダブルカットトレボンフロアブル	2 2	100mℓ /1000倍 100mℓ /1000倍	3 2	収穫 7日前まで 穂揃期まで	

⑤本田病害虫（無人ヘリコプター防除）

対象病害虫	防除時期	処理方法	薬剤名	成分数	希釈 倍数	散布水量 (10a)	使用回数	安全使用基準	防除方法・注意事項
ウンカ類 カメムシ類	6月中旬～ 8月下旬	茎葉 散布	トレボンエアー	1	8倍	0.8ℓ	3	収穫14日前まで 収穫 7日前まで 収穫14日前まで	地上液剤少量散布参照 
いもち病	7月中旬～ 8月下旬		スタークル液剤10	1	8倍	0.8ℓ	3		
			キラップフロアブル	1	8～16倍	0.8ℓ	2		
いもち病	7月中旬～ 8月下旬	茎葉 散布	ビームエイトゾル	1	5～8倍	0.8ℓ	3	収穫 7日前まで 収穫 7日前まで	
			ブラシンゾル	2	8倍	0.8ℓ	2		
いもち病 カメムシ・ウンカ類	7月中旬～ 8月下旬	茎葉 散布	ビームエイトスタークルゾル	2	8倍	0.8ℓ	3	収穫 7日前まで 穂揃期まで	
			ダブルカットトレボンフロアブル	3(2)	8倍	0.8ℓ	2		

※薬剤成分数の（ ）内はYES!clean農産物の栽培における成分数
※薬剤使用回数「〇回以内」



水稲生育調整剤使用基準

①植物成長調整剤

薬剤名	使用時期	処理方法	使用量	成分数	使用回数	注意事項
スミセブンP液剤	催芽直前	種子浸漬	250倍液 15~24時間浸漬	1	1	薬液:種籾の体積比は1:1程度。 浸漬後に水洗いを行わない。 覆土は厚くならないように注意するとともに第一鞘高を伸ばさないよう温度管理に注意する。 草丈が短くなるので田面の均平に努め移植後の水管理に注意する。

②水稲倒伏軽減剤

薬剤名	使用時期	処理方法	使用量 (10a)		成分数	使用回数	注意事項
ビビフルフロアブル	出穂10日~2日前	茎葉散布	75mℓ~100mℓ	通常散布 水量50~150ℓ 少量散布 水量25~50ℓ	1	1	重複散布や多量散布にならないよう注意し、均一に散布する。 降雨直後、あるいは降雨が予想される場合は、散布を控える。
			100mℓ	無人ヘリコプター散布 水量0.8ℓ			

水稲除草剤使用基準

①苗代除草剤

薬剤名	使用時期	成分数	使用量	使用回数	注意事項
クリンチャーEW	は種後10日~ノビエ5葉期まで	1	1,000倍 18mℓ/箱	1	ヒエ専用剤

②水田除草剤

処理時期	薬剤名	使用時期	成分数	使用量(10a)	使用回数	注意事項		
初期	ハヤドリフロアブル	移植直後～ノビエ1葉期	2	500mℓ	1	散布後は7日以上止め水を続ける。		
	草笛ジャンボ			50g×10個				
	エリジャン乳剤	移植直後～ノビエ1葉期まで	1	300mℓ				
	スタメンフロアブル	移植直後～ノビエ発生始期		500mℓ				
	ソルネット1和粒剤	移植直後～ノビエ1葉期まで		1kg				
初中期一発	ルンバ楽粒	移植直後～ノビエ2.5葉期(但し、移植後30日まで)	3	250g	1	<div style="text-align: center;"> <p>安全使用基準を守ろう</p>  </div>		
	サキガケ楽粒	移植直後～ノビエ2葉期(但し、移植後30日まで)						
	イッセン1キロ粒剤・豆つぶ250	移植後3日～ノビエ2.5葉期(但し、移植後30日まで)						
	テッシンフロアブル	移植直後～ノビエ1.5葉期						
	アツパレZ1キロ粒剤	移植直後～ノビエ2.5葉期(但し、移植後30日まで)						
	アツパレZフロアブル	移植後3日～ノビエ2.5葉期(但し、移植後30日まで)						
	アツパレZジャンボ	移植後3日～ノビエ2.5葉期						
	レオゼータフロアブル	移植後3日～ノビエ3.5葉期						
	レオゼータ1キロ粒剤	移植直後～ノビエ3.5葉期						
	エンペラー1キロ粒剤・豆つぶ250	移植直後～ノビエ2.5葉期(但し、移植後30日まで)						
	エンペラージャンボ・フロアブル							
	ジャスタ1キロ粒剤・フロアブル	移植直後～ノビエ3葉期(但し、フロアブルは砂壌土+5日から)						
	ジャスタジャンボ	移植後1日～ノビエ2.5葉期						
中期	クリンチャー1キロ粒剤	移植後15日～35日(ノビエ4葉期、収穫30日前まで)	1	1kg	2	水深5cmで止水散布 ヒエ専用剤		
	ヒエクリーン1キロ粒剤・豆つぶ250	移植後15日～35日(ノビエ2～4葉期、収穫45日前まで)						
	アトトリ1キロ粒剤	移植後20日～40日(稲5葉期以降、収穫45日前まで)			1	1kg・250g	1	湛水散布、水深5cmで止水散布、ホタルイに効果が劣る
	アトトリ豆つぶ250	移植後20日～40日(ノビエ4葉期、稲5葉期以降)						
後期	クリンチャーEW	移植後25日～40日(ノビエ2～6葉期、収穫30日前まで)	1	100mℓ	2	湛水または落水散布 ヒエ専用剤 展着剤を加用		
	クリンチャーバスME液剤	移植後25日～40日(ノビエ2～5葉期、収穫50日前まで)	2	1,000mℓ			湛水または落水散布 展着剤は加用しない	
	バサグラン粒剤	移植後20日～45日(収穫45日前まで)	1	3～4kg	1	湛水または落水散布		
	ワイドアタックSC	移植後25日～40日(稲6葉期以降、ノビエ5葉期まで、収穫30日前まで)						
藻類	モゲトン粒剤	藻類発生期～盛期(収穫45日前まで)		2～3kg	3	水深3～4cmで止水散布		

フロアブル剤は、ノズル散布すると薬害が発生するので避ける。

③直播栽培本田除草剤

薬 剤 名	使 用 時 期	成分 数	散布量/10a	使用 回数	収 穫 前 使用日数
ピラクロン1キロ粒剤	は種時	1	1kg	1	60日
ペルーガ1キロ粒剤	播種直後～ノビエ2.5葉期まで	2	1kg	1	75日
エンペラーフロアブル	稲1葉期～ノビエ3葉期	3	500mℓ	1	65日
エンペラー1キロ粒剤	稲出芽揃期～ノビエ3葉期	3	1kg	1	60日
クリンチャーEW	は種後10～40日(ノビエ5葉期まで、収穫30日前まで)	1	100mℓ	2	30日
クリンチャーバスメ液剤	は種後30～40日(ノビエ5葉期まで、収穫50日前まで)	2	1,000mℓ	2	50日
バサグラン液剤	は種後35～50日	1	500～700mℓ	2	50日
ワイドアタックSC	稲3葉期以降、ノビエ5葉期まで(落水散布)	1	100mℓ	2	30日
ジャスタ1キロ粒剤	は種時	3	1kg	1	90日
ジャスタフロアブル	稲1葉期～ノビエ3葉期	3	500mℓ	1	90日

何を… いつ…
どのように…



“防除日誌”は適正・効率防除を裏づける
栽培履歴の記帳で安全・安心

- (1) 体系是正剤（一発処理除草剤）を使用する場合は年1回散布を基本として雑草の生育状況（ノビエの葉令等）を的確に把握し処理する。
- (2) 除草剤の散布は水深3～5cmで止水にして行い、散布後も4～5日間は入水あるいは落水を避けて水の移動や流出を防止する。
また、畦畔のひびからの漏水を防ぐため畔塗りなどの畦畔整備に努める。
- (3) 散布にあたっては、風向等に十分注意して、薬剤が近接ほ場へ飛散しないよう細心の注意を払う。
- (4) 河川に水田除草剤を流出させないように正しく使いましょう。

水田除草剤使用上の注意

④畦畔雑草除草剤

薬 剤 名	使 用 時 期	使 用 量 (10a)	使用 回数	注 意 事 項
クサトリキング	雑草生育期・草丈30cm以下 ・収穫14日前	一年生雑草:250～500mℓ 多年生雑草:500～1,000mℓ 散布液量100ℓ(少量散布25ℓ)	2	少量散布は専用器具を使用する。
ラウンドアップ マックスロード	雑草生育期・草丈30cm以下 ・収穫前日まで	200～500mℓ 散布液量50～100ℓ(少量散布5～25ℓ)	3	雑草が大きくなりすぎると(草丈30cm以上)効果が劣るので、時期を失しないよう散布する。 少量散布は専用器具を使用する。
タッチダウンiQ	雑草生育期・草丈30cm以下 ・収穫14日前	一年生雑草:250～500mℓ 多年生雑草:500～1,000mℓ 散布液量50ℓ	2	
バスタ液剤	移 植 前・雑草生育期 ・草丈30cm以下 ・収穫7日前	750～1000mℓ 散布液量100～150ℓ	2	



病害虫発生予察を活用した防除技術対策（発生対応型防除体系）

病害虫名	項目	防除基準の判断など																								
いもち病	被害許容水準 要防除水準	穂いもちの病穂率5%以下(この許容水準と発生対応型防除体系は、葉いもち耐病性「やや弱」以上の品種の場合適用される。きらら397・ななつぼし・ゆめぴりか:やや弱、ほしのゆめ:弱) 幼穂形成期5日後もしくは止葉始から1週間間隔で見歩き調査を行う。(7月10日以前は調査不要)1畦10m、4カ所を調査し葉いもち病斑がなければ出穂前の防除は不要。 基幹防除として出穂期に防除を実施する。 葉いもちの発生が増加傾向の時は出穂期7~10日後に防除を行う。 ・穂いもちほ場抵抗性“やや強~強”のきたくりんでは、周囲にいもち病多発ほ場等がなければ本田防除は不要。																								
イネドロ オウムシ	被害許容水準 要防除水準	移植栽培では、被害最盛期の被害葉率50%までは減収しないが70%以上では減収する。 直播栽培では、被害葉率15%程度で減収することがある。 産卵最盛期(6月)に株当たり2卵塊以上になったら防除する。中庸な水田の畦畔から2~3m入った10株の卵塊数を調査し10卵塊以下なら防除不要。																								
イネミズ ゾウムシ	要防除水準	水田中央部付近で、移植方向とは直角に10列(10株)の食害株の有無を調査。10株中に1株でも無被害株があれば防除不要と判定。あるいは、50株(10株×5カ所)調査し株あたり成虫数0.5頭以下または食害株率70%以下であれば防除不要と判定。																								
ヒメトビ ウンカ	要防除水準	吸汁被害防止:夏期(8月後半の第3回成幼虫)が株当たり50頭(20回すくい取りで成虫換算1,800頭、幼虫換算で900頭)以上の時および達すると予想される場合に防除する。																								
アカヒゲ ホソミドリ カスミカメ	被害許容水準 追加防除の要否	斑点米混入率0.1%以下 必須防除2回(出穂期とその7~10日後)である。 その後は水田内20回振りすくい取り(防除予定日2~3日前)の虫数で3回目以降防除の要否を判断する。 (きたくりん:3頭、きらら397・ななつぼし・ゆめぴりか:2頭、ほしのゆめ:1頭) 高温年は10日間隔の防除では被害が懸念されるので、防除間隔を短くするとともにすくい取り間隔も短くする。																								
フタオビ コヤガ	要防除水準	幼虫の発生最盛期に10株の幼虫被害を調査し防除要否を判断する。 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>第1回目</th> <th>第2回目</th> <th>第3回目</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>調査時期</td> <td>6月下旬</td> <td>7月下旬</td> <td>8月下旬</td> </tr> <tr> <td>要防除水準(幼虫数/株)</td> <td>2.7</td> <td>8.7</td> <td>26.0</td> </tr> <tr> <td>被害葉数(枚/株)</td> <td>22</td> <td>65</td> <td>100以上</td> </tr> <tr> <td>被害葉率(%)</td> <td>44*</td> <td>65**</td> <td>100**</td> </tr> <tr> <td>被害株率(%)</td> <td>100</td> <td>100</td> <td>100</td> </tr> </tbody> </table> <p>被害株率が100%に達していなければ防除不要と判断する。被害株率が100%に達していても、被害葉率が各調査時期の値に達していなければ防除不要と判断する。 *:株あたり葉数を50枚として算出 **:株あたり葉数を100枚として算出</p>	項目	第1回目	第2回目	第3回目	調査時期	6月下旬	7月下旬	8月下旬	要防除水準(幼虫数/株)	2.7	8.7	26.0	被害葉数(枚/株)	22	65	100以上	被害葉率(%)	44*	65**	100**	被害株率(%)	100	100	100
項目	第1回目	第2回目	第3回目																							
調査時期	6月下旬	7月下旬	8月下旬																							
要防除水準(幼虫数/株)	2.7	8.7	26.0																							
被害葉数(枚/株)	22	65	100以上																							
被害葉率(%)	44*	65**	100**																							
被害株率(%)	100	100	100																							

畑作物栽培計画

	月	3月		4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月		
	旬	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	
麦類	秋小麦 (きたほなみ)	融雪促進 越冬		追肥 起生期		追肥 除草剤散布 幼形期		追肥 止葉期		病虫害防除 出穂期		収穫 成熟期							は種 出芽					雪腐病防除 越冬			
	初冬まき春小麦 (春よ恋)	融雪促進 越冬		施肥 起生期		除草剤散布 幼形期				追肥 病虫害防除 出穂期		収穫 成熟期														は種 越冬	
	春小麦 (春よ恋)	融雪促進			は種 出芽		除草剤散布 幼形期			病虫害防除 出穂期		収穫 成熟期															
	大麦	融雪促進			は種 出芽		幼形期			病虫害防除 出穂期		収穫 成熟期															
	ハトムギ	融雪促進			は種 出芽							追肥 出穂期															収穫
豆類	大豆 (トヨコマチ)						は種 除草剤散布 出芽期			病虫害防除																収穫 成熟期	
	小豆 (エリモ、しゅまり)						は種 除草剤散布 出芽期			病虫害防除					開花期											収穫 成熟期	



畑作物施肥基準

①-1 秋小麦の基肥基準

(kg / 10a)

土壌区分	目標数量 (kg / 10a)	チッ素	リン酸	カリ
低地土	580	4.0	12.0	9.0
泥炭土	580	4.0	14.0	10.0
台地土	580	4.0	14.0	9.0

①-2 秋小麦の分肥基準

(kg / 10a)

品種	茎数 (本 / m ²)	分肥窒素施肥量の目安		
		起生期 (4月上旬)	幼穂形成期 (5月上旬)	止葉期 (5月下旬)
きたほなみ	1,000本 / m ² ~	0kg / 10a	6kg / 10a	4kg / 10a
	~ 1,000本 / m ²	6kg / 10a	4kg / 10a	

※3回目の追肥は、倒伏のリスクがあるので茎数、葉色を見ながら加減を行う。(出穂期の茎数が多く、止葉直下葉が葉色 (SPAD) 50以上では追肥を行わない。)

- 基肥基準は一定の地力水準を前提に、必要とされるチッ素、リン酸、カリの施肥量を示したものです。
- 「きたほなみ」は起生期茎数が多い状態で起生期に追肥をすると茎数が過多となり過繁茂となって、倒伏や細麦となりやすい傾向があります。
- 起生期の追肥は起生期の茎数を調べ、茎数が多い場合 (1,000本/m²以上) は追肥をせず、幼穂形成期から追肥を行い茎数のコントロールを行います。
- 起生期茎数が1,000本未満の場合は、早めの追肥を行い茎数を確保します。
- 各生育期節の原則3回実施することで、高収量・タンパク基準値 (9.7~11.3%) を満たすことができます。なお、生育状況に応じ分肥チッ素施肥量を減らすことが可能です。

春小麦・大麦施肥基準

(kg / 10a)

土壌区分	目標収量 (kg / 10a)	チッ素	リン酸	カリ
低地土	360	8.0	12.0	8.0
泥炭土	360	6.0	14.0	9.0
台地土	360	9.0	14.0	8.0

ハトムギの基肥目安

(kg / 10a)

目標収量 (kg / 10a)	チッ素	リン酸	カリ
210	5.0	10.0	5.0

- 施肥基準は一定の地力水準を前提に、必要とされるチッ素、リン酸、カリの施肥量を示したものです。
- 土壌のチッ素肥沃度が高く、倒伏の危険がある場合はチッ素施肥量を30%程度減じる。



②大豆施肥基準

(kg/10a)

土壌区分	目標数量 (kg/10a)	チッ素	リン酸	カリ
低地土	240 ~ 320	1.5	11.0	8.0
泥炭土	240 ~ 320	1.5	12.0	10.0
台地土	240 ~ 320	2.0	12.0	8.0



- 施肥基準は一定の地力水準を前提に、必要とされるチッ素、リン酸、カリの施肥量を示したものです。
- 根粒菌の着生を促進するため、根粒菌の接種を行う。
- 根粒菌の着生が不良な場合は、10kg/10a程度のチッ素追肥が有効である。(開花始頃)
- 転換初年目は、土壌診断を活用し、有効態リン酸が低い場合は、リン酸を増肥する。

④小豆施肥基準

(kg/10a)

土壌区分	目標数量 (kg/10a)	チッ素	リン酸	カリ
低地土	200 ~ 300	3.0	10.0	7.0
泥炭土	200 ~ 300	2.0	12.0	10.0
台地土	200 ~ 300	4.0	15.0	8.0



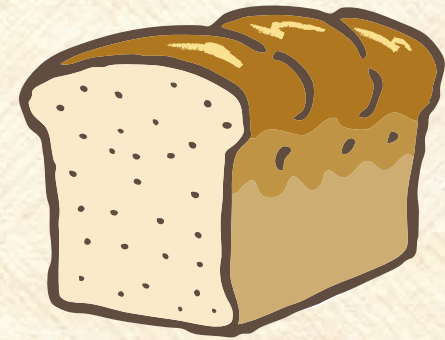
- 施肥基準は一定の地力水準を前提に、必要とされるチッ素、リン酸、カリの施肥量を示したものです。
- 根粒菌の着生を促進するため、根粒菌の接種を行う。
- 基肥チッ素は初期生育確保に必要であり、有機物施用に伴う施肥対応に際しても最低2kg/10a程度を施用する。
- 土壌のチッ素肥沃度が低い場合は、5kg/10a程度のチッ素追肥が有効である。(第3本葉展開期)
- 転換初年目は、土壌診断を活用し、有効態リン酸が低い場合は、リン酸を増肥する。

畑作物肥料主要銘柄

①麦類使用銘柄

(成分量 %)

銘柄名	チッ素 (アンモニア態)	リン酸 (水溶性)	カリ	苦土	備考
BB082	10.0(10.0)	18.0(12.0)	12.0	5.0	基肥用<秋まき小麦>
BB850Cu	8.0(8.0)	25.0(15.0)	10.0	5.0	(銅0.04)基肥用<秋まき小麦>
BB532	15.0(9.5)	23.0(15.0)	12.0	5.0	基肥用<春まき小麦・大麦>
BB121	10.0(10.0)	20.0(13.0)	10.0	5.0	基肥用(ハトムギ)
BBNK20	20.0(16.0)		10.0		追肥用
硫安	21.0(21.0)				追肥用
尿素	46.0				追肥用
BBM30	30.0				追肥用



②豆類使用銘柄

(成分量 %)

銘柄名	チッ素 (アンモニア態)	リン酸 (水溶性)	カリ	苦土	備考
BBS343	3.0(3.0)	24.0(20.0)	13.0	4.0	基肥用<大豆>
BBS559	5.0(5.0)	25.0(20.0)	9.0	6.0	基肥用<大豆・小豆>
BBS643	6.0(6.0)	24.0(18.0)	13.0	4.0	基肥用<小豆>
硫安	21.0(21.0)				追肥用



③土壌改良等使用銘柄

銘柄名	保証成分
タンカル	アルカリ分53%
防散炭カル	アルカリ分50%
苦土炭カル	アルカリ分53%、<溶性苦土6%
防散融雪炭カル	アルカリ分50%(カーボンブラック0.5%)
ダブリン	<溶性リン酸35%(水溶性リン酸17%)><溶性苦土7%(水溶性苦土3%)>

畑作物病虫害防除基準

① 麦類病虫害防除基準

(1) 秋まき小麦(きたほなみ)病虫害防除基準

防除時期	対象病虫害	薬剤名	希釈倍数 (水量)	10a当り 薬量	安全使用基準	耕種の防除・注意事項
根雪前	なまぐさ黒穂病 雪腐大粒菌核病 紅色雪腐病 褐色小粒菌核病 黒色小粒菌核病	フロンサイドSC または フロンサイドSKY	1,000倍 8倍(0.8ℓ) 16倍(1.6ℓ)	100mℓ 100mℓ 100mℓ	根雪前/2回 根雪前/2回	連作を避け合理的な施肥に努める。 適期は種、融雪促進を行う。
	褐色雪腐病	ランマンフロアブル	1,000倍 8倍(0.8ℓ)	100mℓ 100mℓ	根雪前/3回	適期は種、融雪促進を行う。
幼穂形成期頃	眼紋病(連作ほ場)	ファンタジスタ顆粒水和剤 または キンセツ水和剤80	2,000倍 400倍	50g 250g	収穫14日前/3回 収穫60日前/5回	連作を避け3年以上の輪作を行う チッ素を多用しない。適正は種を守る。
		赤さび病	ミリオネアフロアブル	4,000~ 8,000倍 32倍(0.8ℓ)	25~ 12.5mℓ 25mℓ	収穫7日前/2回
開花始	赤かび病	プロラインフロアブル または バラライカ水和剤	2,000倍 500倍 4倍(0.8ℓ)	50mℓ 200g 200g	収穫7日前/2回 収穫14日前/2回	赤かび病は開花始から秋小麦は2回を基本とする。 同一系統の薬剤を連用しない。
		ミラビスフロアブル	1,500倍 8倍(0.8ℓ)	66mℓ 100mℓ	収穫7日前/2回	赤かび病は開花始から秋小麦は2回を基本とする。
		シルバキュアフロアブル	2,000倍 16倍(0.8ℓ)	50mℓ 50mℓ	収穫7日前/2回	同一系統の薬剤を連用しない。 出穂10日頃にはほ場を観察して、1穂あたり7~11頭のアブラムシが寄生すると減収するので防除を行う。 トレボン乳剤は、アブラムシ類のみ登録がある。
6月中旬~ 7月中旬	アブラムシ	エルサン乳剤 トレボン乳剤	1,000倍 2,000倍	100mℓ 50mℓ	収穫7日前/4回 収穫14日前/2回	
6月上旬~ 開花始~糊熟期	ヒメトビウンカ	トレボンエアー	8倍(0.8ℓ)	100mℓ	収穫14日前/2回	

※フロンサイドSKY使用時に皮膚かぶれを生じる場合がございますので、ご購入の際は注意喚起動画(10分程度)の視聴、安全使用同意書へのサインが必要となります。

(2) 春まき小麦（春よ恋）病害虫防除基準

防除時期	対象病害虫	薬剤名	希釈倍数 (水量)	10a当り 薬量	安全使用基準	耕種的防除・注意事項
5月下旬	ムギキモグリバエ	エルサン乳剤	1,000倍	100mℓ	収穫 7日前/4回	
開花始	赤かび病	プロラインフロアブル または バラライカ水和剤	2,000倍 500倍 4倍(0.8ℓ)	50mℓ 200g 200g	収穫 7日前/2回 収穫14日前/2回	春まき小麦は3回の防除を徹底する。同一系統の薬剤を連用しない。
		ミラビスフロアブル	1,500倍 8倍(0.8ℓ)	66mℓ 100g	収穫 7日前/2回	
		シルバキュアフロアブル	2,000倍 16倍(0.8ℓ)	50mℓ 50mℓ	収穫 7日前/2回	
6月中旬～ 7月中旬	アブラムシ	エルサン乳剤 トレボン乳剤	1,000倍 2,000倍	100mℓ 50mℓ	収穫 7日前/4回 収穫14日前/2回	トレボン乳剤はアブラムシ類のみ登録がある
開花始～糊熟期	ヒメトビウンカ	トレボンエアー	8倍(0.8ℓ)	100mℓ	収穫14日前/2回	

(3) 麦類植物成長調整剤使用方法

薬剤名	対象作物	使用時期	10aあたり使用量 (水量100/10a)	使用 回数	注意事項
サイコセルPRO	秋まき小麦	幼穂形成期 出穂前10～20日 (草丈40～60cm)	150～200mℓ 200～300mℓ	1 1	総使用回数は2回以内 散布時期が遅れると効果は劣る 極端な多肥条件では茎の伸長を抑制するのは困難である。 高温時の散布を避け、晴天の日は夕方に散布する。 散布直後に降雨があっても再散布は行わない。 展着剤は加用しない
	春まき小麦	小麦6葉期前後 (草丈30～40cm)	150mℓ	1	
カルタイムフロアブル	秋まき小麦・ 春まき小麦	止葉期～出穂始期	150mℓ	1	散布時期が遅れると効果は劣る・展着剤は加用しない 高温時の散布を避け、晴天の日は夕方に散布する
エスレル10	秋まき小麦 春まき小麦	止葉期～出穂始期 止葉期	200～333mℓ(水量100ℓ) 200～333mℓ	1 1	散布直後に降雨があっても再散布は行わない。 展着剤を加用しない

(4) ハトムギ病害虫防除基準

病害虫名	防除時期	薬剤名	希釈倍数	10a当り薬量	安全使用基準	耕種的防除・注意事項
黒穂病 葉枯病	は種前(種子粉衣)	バンレートT水和剤20	種子重量の0.5%粉衣		は種前/1回	
	は種前(72時間種子浸漬)		200倍	—		

②豆類病害虫防除基準

(1) 大豆

防除時期	対象病害虫	薬剤名	希釈倍数 (水量)	10a当り 薬量	安全使用基準	耕種的防除・注意事項
は種前 (塗沫処理)	タネバエ・アブラムシ・ 苗立枯病	クルーザーMAXX	乾燥種子1kg当たり8mℓ		は種前/1回	斑点細菌病には適用がないため注意する。
6月下旬 (は種後1ヵ月)	アブラムシ類 (わい化病)	オルトラン水和剤	1,000倍 16倍(1.6ℓ)	100g 100g	収穫60日前/3回	アブラムシの発生量が少ない場合は、散布回数を減らすことができる。
7月上旬	ツメクサガ・ アブラムシ類	アディオン乳剤	3,000倍 24倍(0.8ℓ)	33mℓ 33mℓ	収穫7日前/3回	
開花開始後★	菌核病	スクレアフロアブル または トップジンM水和剤	2,000倍 16倍(1.6ℓ) 700~1,000倍	50mℓ 100mℓ 100~142g	収穫前日まで/3回 収穫14日前/4回	連作及び多肥栽培を避ける。 開花始後10~15日目から10日毎に2~3回散布
莢伸長始後★	マメシンクイガ	プレバゾンフロアブル5 または ゲットアウトWDG	4,000倍 16~32倍(0.8ℓ) 3,000倍 24倍(0.8ℓ)	25mℓ 25~50mℓ 33g 33g	収穫7日前/2回 収穫7日前/3回	
★の10日後	マメシンクイガ	スミチオン乳剤 または トクチオン乳剤 または エルサン乳剤	1,000倍 8倍(0.8ℓ) 1,000倍 1,000倍	100mℓ 100mℓ 100mℓ 100mℓ	収穫21日前/4回 収穫30日前/3回 収穫7日前/2回	
※過去に発生した ほ場 大豆3葉期頃	茎疫病	フェスティバルC水和剤 または ランマンフロアブル	600倍 1,000~ 2,000倍	166g 50~100mℓ	収穫7日前/3回 収穫7日前/3回	連作を避ける。 排水不良地で発生しやすい。
※要防除水準に達 したほ場 開花期	べと病	ホライズンドライフロアブル	2,500倍	40mℓ	収穫7日前/3回	要防除水準は開花始の上位葉に病斑個数 30個/葉以上である。 開花始に要望如水順に達しなかった場合は防除不要

(2) 小豆

防除時期	対象病害虫	薬剤名	希釈倍数 (水量)	10a当り 薬量	安全使用基準	耕種的防除・注意事項																				
は種前 (種子粉衣)	タネバエ・苗立枯病 褐斑細菌病	粉衣用ペアーカスミンD	種子重量の0.3%粉衣		は種時/1回	吸湿性が強いので、は種直前に使用する。 タネバエは牧草等の後作すき込み直後の 被害が大きい。																				
は種前 (種子粉衣)	アブラムシ類・ タネバエ・茎疫病	クルーザーMAXX	乾燥種子1kg当たり原液8mℓ		は種時/1回	根粒菌を粉衣する場合は「クルーザー MAXX」→「根粒菌」の順に使用する。																				
播種前 (6月中旬～)	褐斑細菌病	カスミンボルドー	1,000倍	100g	収穫30日前/3回	6月中旬～7月下旬にはほ場観察を徹底し、 発病株を抜き取る。抜き取り直後とその 1週間後に防除を行う。																				
6月下旬～ 8月下旬	茎疫病	ランマンフロアブル フェスティバルC水和剤	1,000倍 600倍	100g 166g	収穫7日前/3回 収穫7日前/3回	連作を避け、透水性をよくする。 高畦栽培は有効である。																				
7月上旬～ 8月中旬	輪紋病	ゲッター水和剤	1,000倍	100g	収穫14日前/4回	開花始後7～10日目から10日毎に3回 散布。耐性菌抑制のため、同一系統の薬 剤の連用を避けるゲッター水和剤は輪紋 病に登録あり(1500倍)。																				
開花始後7～10 日目から10日毎	菌核病、灰色かび病	ファンタジスタ顆粒水和剤 プライア水和剤	2000倍 1,000倍	50g 100g	収穫7日前/3回 収穫14日前/4回																					
7月上旬～ 8月上旬	ツメクサガ	トクチオン乳剤	1,000倍	100mℓ	収穫30日前/2回	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">農薬適用表</th> </tr> <tr> <th>薬剤名</th> <th>アブラムシ</th> <th>ツメクサガ</th> <th>アズキノメイガ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>トクチオン</td> <td></td> <td>○</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>トレボン</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>ゲッターアウト</td> <td>○</td> <td></td> <td>○</td> </tr> </tbody> </table>	農薬適用表				薬剤名	アブラムシ	ツメクサガ	アズキノメイガ	トクチオン		○	○	トレボン	○			ゲッターアウト	○		○
農薬適用表																										
薬剤名	アブラムシ	ツメクサガ	アズキノメイガ																							
トクチオン		○	○																							
トレボン	○																									
ゲッターアウト	○		○																							
7月下旬～ 8月中旬	アズキノメイガ	トレボン乳剤 ゲッターアウトWDG	1,000倍 3,000倍	100mℓ 33g	収穫14日前/2回 収穫7日前/3回																					
発生初期	ハダニ類	ニッソラン水和剤 ダニトロンフロアブル	2,000～ 3,000倍 1,000～ 2,000倍	33～50g 50～100g	収穫14日前/2回 収穫7日前/1回	防除効果を高めるために発生初期に散布する。 同一系統の連用は効果が低下(抵抗性)する ので避ける。																				

畑作物栽培は、耕種的防除を第一とし、薬剤防除は補助的手段としましょう。

畑作物の病害は、土壌環境の改善により大きく回避することが可能です。

適正な施肥、連作から輪作への作付形態の見直し透排水性の向上、融雪促進など徹底した耕種的防除に努めましょう。



畑作物除草剤使用基準

①麦類除草剤使用基準

除草剤名	処理方法	使用時期	成分数	10a当り薬量	対象雑草	安全使用基準	備考・注意事項	
ガルシアフロアブル	土壌処理	秋小麦:は種後出芽前(雑草発生前) 春小麦:小麦1~3葉期(雑草発生始期)	2	150~250ml 200ml	1年生イネ科雑草・広葉雑草 (イヌカミツレに有効)	1回	砂土、過湿で排水性不良ほ場での使用を避けましょう。イヌカミツレが多発するほ場は、使用基準の範囲で高薬量で使用する。麦の葉身に白化が見られることがあるが、その後回復する。	
	雑草処理	秋小麦:出芽直前~3葉期 (雑草発生前~発生始期)		100~200ml				
ガレス乳剤	土壌処理	秋小麦:は種後~出芽前 春小麦:は種後~出芽前	2	200ml 200~250ml	1年生イネ科雑草・広葉雑草 (ハコベ・ナズナ・スカシタゴボウ)	1回	過湿の透排水不良ほ場での使用を避ける。雑草処理の場合、スズメノカタビラは生育が進むと効果が劣る。	
	雑草処理	小麦出芽後~出芽揃期 小麦の1~3葉期		150~250ml 100~150ml				
エコパートフロアブル	雑草処理 (接触性)	秋小麦:2~4葉期 止葉抽出前(春)収穫45日前まで	1	50~75ml	1年生広葉雑草	2回	有機リン剤や混用使用が確認されていない薬剤との同時施用、7日以内の近隣散布は葉害の恐れがあるので避ける。	
ハーモニーDF	雑草処理	秋小麦:幼穂形成期(春)収穫45日前まで 春小麦:麦の3~5葉期	1	7.5~10g 3~5g		1回	散布後速やかに専用剤でタンク・ホース内を洗浄する。葉が変色する場合がある。	
キタシーブフロアブル	雑草茎葉散布 または 全面土壌散布	は種後~小麦3葉期 (雑草発生前から発生始期)	1	80~100ml	1年生雑草	1回	砂質で水はけの良い畑では葉害を生じる恐れがあるので、所定量の範囲内で少なめの薬量で散布する。雑草の発生前から発生始期まで有効なので、時期を失しないよう散布する。	
MCPソーダ塩	雑草処理	秋小麦:幼穂形成期(春)収穫45日前まで 春小麦:麦の5葉期、収穫45日前まで	1	300g 200~300g	広葉雑草 (ハコベ・ダテ類には効果が劣る)	1回	効果は、日中気温が20℃以上の晴天時に生育盛んなほど高い。	
バサグラン液剤	雑草茎葉散布 または 全面土壌散布	麦の幼穂形成期 収穫45日前まで	1	100~150ml	1年生雑草(イネ科を除く)	1回	散布後降雨があると効果が劣るのでなるべく晴天の続くことが見込まれるときに散布する。シロガ、タニソバに対しては低薬量で効果が劣ることがある。	
ラウンドアップマックスロード	作付予定 及び 収穫後の 雑草処理	秋小麦:耕起前まで (雑草生育期)	1	200ml~ 500ml	(通常散布または 少量散布) 水量25~100l	イネ科 雑草 広葉 雑草	3回	周辺の作物に薬剤が飛散しないよう注意する。少量散布の場合は専用ノズルを使用する。
クサトリキング		秋小麦:耕起前まで (雑草生育期草丈30cm以下)	1	250ml~ 500ml				
タッチダウンIQ		秋小麦:耕起3日以前 (雑草生育期)	1	500ml~ 750ml				

②ハトムギ除草剤使用基準

除草剤名	処理方法	使用時期	成分数	10a当り薬量	対象雑草	安全使用基準	備考・注意事項
ゲザプリムフロアブル	土壌処理	は種後～出芽前(雑草発生前)	1	200mℓ	一年生雑草(水量100ℓ)	1回	
ラッソー乳剤	土壌処理	は種後～出芽前	1	300~600mℓ	一年生雑草(水量100ℓ)	1回	
バサグラン液剤	雑草処理	雑草3~6葉期 (但し、収穫45日前まで)	1	150mℓ	一年生雑草(水量70~100ℓ) イネ科を除く	2回以内	

③豆類除草剤使用基準

除草剤名	処理方法	使用時期	成分数	10a当り薬量	対象雑草	安全使用基準	備考・注意事項
ロロックス	土壌処理	大豆:は種直後	1	100~150g	一年生広葉雑草	1回	雑草が大きくなると効果が劣るので、雑草の発生直前か発生始期に散布する。
パワーガイザー液剤	土壌処理 雑草処理	大豆・小豆:出芽直前～ 出芽揃 (雑草発生始～揃)	1	200~300mℓ	一年生広葉雑草	1回	高薬量また初生葉期以降での散布では、薬害が発生する恐れがあるので、使用量、時期を厳守する。 有機リン系殺虫剤または、イネ科雑草処理除草剤との10日以内の近隣散布は、薬害の恐れがあるので避ける。
フルミオWDG	土壌処理	大豆:播種後出芽前 (雑草発生前)	1	5~10g	一年生広葉雑草	1回	処理時期が出芽期に近いと生育抑制が生じる場合があるので処理が遅れないようにする。 散布後は、タンク・ホースなど専用洗浄剤で洗浄する。
ナブ乳剤	雑草処理	イネ科雑草3~5葉期 大豆:収穫30日前まで 小豆:収穫14日前まで	1	150~200mℓ	一年生イネ科雑草 (スズメノカタビラには効果が劣る)	1回 (小豆は2回)	効果の発現には2週間程度を要する。
ポルトフロアブル	雑草処理	イネ科雑草3~6葉期 イネ科雑草7~8葉期 大豆:収穫30日前まで 小豆:収穫50日前まで	1	200~250mℓ	一年生イネ科雑草 (スズメノカタビラには効果が劣る)	2回 (小豆は1回)	イネ科雑草が完全に枯死するには5~10日間を要する。
セレクト乳剤	雑草処理	イネ科雑草3~5葉期 スズメノカタビラ3~5葉期 大豆:収穫50日前まで 小豆:収穫45日前まで	1	35~ 50mℓ 50~ 75mℓ	一年生イネ科雑草 スズメノカタビラ	1回	イネ科雑草が完全に枯死するには7日前後を要する。 スズメノカタビラへの使用効果の発現には2週間程度を要する。 薬量を75mℓで処理する方が効果が大きい。
大豆バサグラン液剤	雑草処理	大豆:2葉期～開花前 (雑草の生育初期～6葉期) 収穫45日前まで	1	100~ 150mℓ	一年生広葉雑草	1回	薬害が生じやすく、減収する可能性があることを十分認識して使用する。 (使用に際しては必ずJAに相談のこと)